



# IUFRO-J NEWS

No. 1

## IUFRO (S2. 01-06) 種子部会第2回国際集会を運営して

昭和51年10月18日から30日にかけて、S2.01-06種子部会の第2回国際集会が日本で開催された。IUFROの活動として日本で行なわれた国際集会としては、1972年の遺伝集会（林試、戸田博士主宰）について2度目である。S2.01-06種子部会は、Division2の中でもっとも積極的な活動をしているものの一つで、現在登録しているメンバーは400名を超えている。部会長はスウェーデン王立林科大学のM. SIMAK教授で、筆者は3名の捕虫役の一人としてこの部会の活動に参加してきた。1973年9月にノルウェーで第1回集会を開いて以来、ほぼ季刊的にニュースレターを発行して情報をながすとともに、10のプロジェクトをすすめてきた。

第1回集会に参加した際に、SIMAK教授から日本で次回をやれないかと尋ねられたが、その後さらに文書で入力をうけたので、当時の竹原場長に相談してお許しをいただいた。1974年末に最初のサーキュラーをだして予約申込みをうけつけたときには参加希望が50名を超え、ほんとにこれだけきたら大変なことだと心配したものであった。本年はじめ最終申込みをとった段階でも依然として30名ちかい数であったが、直前になって急減し、結局国外からの参加は10名となった。がっかりした反面ほっとしたことも事実である。

10月17日までに9名が到着し、18日の筑波研究学園都市とくに林業試験場ファイトトコンの見学で開幕した。当日夕方には林野庁長官と林業試験場長主催の歓迎レセプションが神田の学生会館で行なわれた。翌19日は途中、平塚の農業技術研究所永年種子貯蔵施設を見学して、午後おそく山中湖畔に到着した。

### 本会議

シンポジウムは、ちょうど紅葉のはじまったカラマツの林に囲まれた山梨県企業局山中湖荘会議室で20日から行なわれた。おくれて到着した1名を加わえ、日本側13名とあわせて8カ国23名であった。主題は「種子の発芽生理」で、関連した研究報告の6セッションと、プ

ロジェクトを検討する2セッションが正味6日間におわたってもたれた。直前になって国外からの参加者が急に減ったので、果して予定していた時間がもつかどうか不安であったが、実際には各セッションとも質疑討論を打切りざるをえないほどで、それでも度々予定時間を超過した。期間中10月22日には、晴天に恵まれて富士5合目のカラマツ、山梨県の探種園・林間苗圃、ハリモミ純林などを見学した。23日の夜は、シンポジウムの会場で山梨県林業試験場から差入れの甲州ワインを味わいながら、参加者がもろよったスライドを紹介しあった。

### エクスカージョン

10月26日から30日にかけて信州路から京都への見学旅行を行なった。比較的天候にも恵まれて、ごく打ちとけた旅であった。経路は〔第1日〕山中湖(甲府)―霧科山―松本、〔第2日〕松本―波田貯蔵庫―東京電力待川発電所―上高地―松本、〔第3日〕松本―平沢(漆器)―奈良井宿―赤沢休養林―坂下ヒノキ探種園―京都、〔第4日〕北山林業、修学院・御所をたずねた。

今回の集会をとおしてもっともつよく感じたことは、申込み方法の問題である。最後まで参加を期待しながら結局参加できなかった人、再三にわたる確認連絡に返事をくれなかった人などさまざまで、組織委員会は最後の土壇場まで予約数の確定ができなかった。シーズンオフをえらんだため、違約金のような出費こそなかったが、人当負担がいちじるしく増加して財政担当者には大変なご苦労をかけた。また英語の討論に積極的に参加することのむずかしさを改めて痛感した。部会長M. SIMAK教授は、日本人が英語になれていないことを心配して、日本語で発言して堪能な人が通訳してくれるように何度か提案されたが、このような方法をあらかじめ検討しておく必要があったと考えている。最後に、この集会を開催するについて物心両面で多大のお力添えをいただいた関係官庁および日本学術振興会・林木種子国際会議協力会の方々にお礼を申しのべます。(浅川彦彦・林試)

## IUFRO 第 16 回 OSLO 大会のエクスカージョンに関する アンケートのまとめ



このアンケートは、オスロ大会でエクスカージョンに参加された方のうち、28 名の方から寄せられたいくつかのアンケート事項のなかから、日本開催に参考になるようなご意見をとりまとめたものである。

### 旅行の計画

視察旅行は綿密な計画と周到な準備とを要するので、できるだけ早く大学、林業試験場等関係機関、関係者からなる準備委員会を設置して組織的準備活動を開始しなければならない。その際準備活動を始めたことを国内の関係者に発表する必要がある。

計画上重要な問題は、1) 資金、2) 言葉、3) コースの選定である。

資金獲得が最も重要で、綿密に計画しなければならない。この大会では参加費を徴集しその手助とした。

最もむずかしいのは外国語（英語）によるエクスカージョン（大会を含む）の運営である。語学の強い人をしてできるだけ沢山揃えなければならない。対応、討論できることが大切で、各部門ごとにそれぞれエキスパートを養成する必要がある。5 年がかりで外国語の教育を第一に努めることで、若い人の徹底教育を望む。16 回大会ではテクニカルリーダーは英独仏語を話した。現地の説明者は 3 か月の英会話特訓を受けた。日本の場合は、英独、英仏語を解する 2 人のテクニカルリーダーを考慮してはどうであろうか。日本式英語をさげ一般的な英語を使うよう留意しなければならない。

### コースの選定

視察旅行を実施することは大変なことで、コースの選定にはとくに慎重な配慮が必要である。コースは研究と観光とを適度に組み合わせてきめなければならない。今回はこの企画に長期間交渉を行なったよして完べきと言ってよい程うまく計画されていた。研究コースについては、専門主題と一般実情（例えば日本の林業）とを適宜織りまぜること。参加者は現地視察と同時に同行者との意見交換、個人的接触を望んでおり、日本の文化にも強い関心をよせているのでスケジュールは余りち密でなく余裕をとっておく方がよい。

現地の説明は技術者と学者とで行なうことが望ましい。しかし現地に明るい、内容をよく知っている人なら誰でもよく、ニューモアがあって会話のうまい、英語で対応、説明できる人がよい。それが適わない場合は通訳が

3 人くらいは必要である。

### 観 光

観光については、日本の火山、温泉、景勝地、博物館、工場なども組み入れてはどうであろう。見物、買物その他のため自由時間をとっておく方がよい。日本の古い文化に接したいという声が強いので、神社仏閣の見物はもちろん、地域の特色のある文化財への接触、その他生花、お茶、盆栽、庭園、文楽、歌舞伎、能、日本舞踊などを適宜織り込む、その配列は容易でない。コース全体を通じて、「どこを見せ、どこで説明するか」がとくに重要で、現地の事前調査が必要である。16 回大会では時間の配分、昼食、ホテルの位置等極めてよく手配されていた。十分わかっている地域でも一年前から精しく調査し、何回もコースを回り、大会前に再度回っている。

### 旅行説明書

旅行説明書（参加者名簿、時間割、見学のポイント、データ、図表、主要樹種の学名と日本名のリスト、宿泊地と通過地の地図、宿舎、文化財の説明）、はコース別にできるだけ早くから準備する必要がある。とくに専門の資料は時間をかけて作成すること。説明の内容も詳しくタイプしておいた方がよい。説明書は前以て配布することが望ましい。現地では説明書と同じ図表を掲示板にかかけ、またサンプル（虫、器具、苗木など）を示して説明が行なわれた。ほかに運材、間伐作業、急傾斜地の伐採作業、集材場の全木チップping作業のデモンストラーションがあった。訪問した会社、大学、ホテルにも展示室が設けてあって図表、写真説明が掲示してあった。

### 開催の時期

開催の時期は 7 月か 10 月、もしくは 8 月、9 月、3 月、11 月、6 月の提案があったが、参加国の要望をよく聞いて決める必要がある。

### 接 待

コース当り参加者数は平均 33 人、参加費は平均 10 万円である。バス 1 台ごとにホスト（夫人同伴）が付くこと、説明者のほかに案内者が 5 名位必要である。バスの中では朝の点呼、当日のニュース、天気予報、名所旧

跡の説明があり、一行の訪問を放送するラジオが放送され、来訪記事ののっている新聞が配布された。景色のよいところはバスを下りて觀賞した。

現地の接待は県、営林局署、会社、工場が担当されたようで、クッキー、ソフトドリンク、ビール、ワインなどが用意された。ホストは参加者全員を自宅に招いて接待した(軽食と飲物)。日本でも婦人ができるだけ沢山参加すること。少数出席国の夫人は孤立する傾向があり、その人達に付添う上にも、小さな疑問、買物をたずねる上にも出席が大切である。夫人同志が知り合って、主人が紹介される例が多い。レセプションには現地の夫人の参加が必要である。

洋食、洋式バスタイレツキのホテル宿泊を考慮すること、できれば個室が望ましい。レセプションは、毎晩で

なくてもよいが、参加者相互の親近感、相互理解のため必要である。日本式宴会、名物を食べる会、地元の歓迎会(民族舞踊など)、地元の人々との話し合いなどを間にはさんでは、レセプションのスポンサーは山持ちの財産家、工場主であった。ほかに会費制のパーティも行なわれた。食事その他に宗教を考慮しなければならない。

金銭の支払いなど事務手続きを手際よくすること。日程はできる限り変更しないこと。止むを得ない時は、文書で早目に徹底させること。

計画、内容の整備、充実のうえにさらに重要なことは熱意と誠意である。16回大会では計画と進行に不備を感じた人もこぞって開催国の誠意と親切とを称えた。第17回大会も誠心誠意万全を期して実りある会議としたい。(事務局)

## IUFRO-J NEWS の発行について

第16回オスロ大会において、つぎの大会が日本で開催されるように決定されたことは、IUFRO 加盟機関の皆さんはすでに、ご承知のとおりですが、オスロ大会出席者の帰国報告を総合すると、この大会運営にはなかなか困難な問題があるように思われる。

しかしながら、日本で引き受けた以上、IUFRO-J としては積極的に各国の要望に応えなければならない、そのため速にその対応方針を確立して準備にはいりたいと考えている。

とくに日本は米国について、第2位の27機関、746名におよぶ大加盟国であり、またアジアで開かれる初めての総会には、各国は相当な期待と関心をもっている。

このことをふまえて、国内体制を確立するための一つの手助けとして、昨年11月 IUFRO-国内委員会

(IUFRO-J) が設定され、本年なかばの幹事会で、IUFRO-J NEWS の発行が決められた。

IUFRO-J NEWS は加盟機関・研究者間の情報紙として、IUFRO 本部からの連絡事項、J の活動および加盟機関の研究活動状況等についての情報交換を行なうのが主たる目的であって、刊行事務は林業試験場(事務局)が担当することになっている。

したがって、加盟機関等で周知すべき皆さんに知ってもらった方がいい事項があれば、その都度原稿をお寄せ願って逐次刊行していきたいと考えている。

また大会対策として近日中に林野庁内に、同庁と林試を中心とした委員会を設置して、準備体制にはいることを予定している。

J としてもこの委員会にどのように接触し、関連して行くか、幹事会等において十分協議を重ねて行きたいと思っているので、よろしくご協力をお願いする次第である。(議長・林試場長 上村 武)

## INFORMATION

### ★ IUFRO 加盟国と機関と登録人員

アメリカ	42 機関 (1610名)	日 本	27 (746)
西ドイツ	14 (291)	カナダ	13 (590)
オーストラリア	13 (288)	英 国	12 (251)
イタリア	12 (108)	チエコスロバキア	7 (204)
フランス	8 (199)	フィンランド	9 (187)
ユーゴスラビア	6 (190)	ソ 連	1 (10)

### ★1977年1月、各研究部会等のリーダー予定者

S1. 02-00 (Site)	*林試 松井 光瑤
S1. 04-01 (Torrent erosion and Control)	*岩大 石橋 秀弘
S2. 01-06 (Seed problems)	林試 浅川 澄彦
S2. 02-07 (Larch provenances)	信大 浅田 節夫
S2. 03-00 (Breeding)	王子紙 千葉 茂
S2. 03-02 (Breeding white pines)	林試 佐保 春芳

- S2. 07-00 (Entomology) \*林試 小林富士夫  
 S2. 07-07 (Pine insects in the tropics)  
 林試 山根 明臣  
 P2. 01-00 (Interaction between site factors and  
 destructive agents) 林試 真下 育久  
 P2. 03-00 (Impacts of destructive agents)  
 林試 山根 明臣  
 S3. 01-00 (Harvesting and transport)  
 林試 山脇 三平  
 S3. 01-05 (Forest roads) 日本から指名予定  
 S3. 02-00 (Operational methods in the  
 establishment and treatment  
 of stands) 京大 佐々木 功  
 S5. 01-03 (Secondary wood changes)  
 京大・木研 樋口 隆昌  
 S1. 08-02 (Characterization and classification  
 of wildlife habitats in Forests)  
 在オーストラリア 橋川 次郎  
 \*印: Group Leader Others: deputies

★理事会 (Executive Board) メンバー

- 会長 W. Liese (西ドイツ)  
 副会長 佐藤大七郎 (日本)  
 前会長 Ivar Samset (ノルウェー)

<地域理事>

- 北欧 V. Holopainen (フィンランド)  
 中欧 R. Brunet (フランス)  
 東欧 Z. Patalas (ポーランド)  
 地中海 E. Giordano (イタリー)  
 アフリカ D. Iyamabo (ナイジェリア)  
 北米 R. Buckman (アメリカ)  
 ラテンアメリカとカリブ N. Carneiro (ブラジル)  
 アジア A. Yachkaschi (イラン)  
 西太平洋 C. Bassett (ニュージーランド)

<研究部会長>

- Div. 1. D. Mlinsek (ユーゴスラビア)  
 Div. 2. R. Z. Callaham (アメリカ)  
 Div. 3. R. Silversidis (カナダ)  
 Div. 4. R. Plochmann (ドイツ)  
 Div. 5. W. E. Hillis (オーストラリア)  
 Div. 6. J. Pardé (フランス)

<会長指名名理事>

- U. Sundberg (スウェーデン)  
 N. A. Moiseev (ソ聯)

<事務局長> O. Bein (オーストラリア)

<FAO 代表> K. King (FAO)

<オブザーバー> M. Jemison (アメリカ)

- J. Speer (ドイツ)  
 松井光瑤 (日本)

★新理事会の開催

オスロ大会の決定により新理事会は1977年1月1日から発足することとなり、第1回会合が明年2月13日から3~4日間、それに引きつづいて約5日間のニクスカーションがナイジェリアのイバダンで開催される。

この会合は地域理事と部会長であって、本理事会は1977年初秋カナダで開かれる予定である。

★IUFRO メンバーの新規加盟について

IUFRO のメンバーとして新規加盟をご希望の方々にオーストラリアの IUFRO 本部事務局より申込方法等について通知があった。この事務局の住所は下記のとおりであり、申込用紙等については、IUFRO-J にも保管してある。

The IUFRO Secretariat  
 Schönbrunn-Tirolergarten  
 A-1131 Wien, AUSTRIA

★第16回オスロ大会記事

大会に参加された方で各種の機関紙に投稿発表されたものは次の通りである(事務局掌握)

(誌名)	(巻号)	(執筆者)
林業技術	10月号	松井 光瑤ほか
林野時報	9月号	松井 光瑤
木材工業	10月号	雨宮 昭二
森林立地	10月号	育光 一登
森林と肥培	90号特	川名 明ほか
木工機械	9月号	松井 光瑤
林試場報	10月号	林 試
山林	12月号	山根 明臣

あ と が き

IUFRO-J ニュース No. 1 をお届けすることになりました。これから5年間の長丁場です。メンバー一同スクラムを組んで行かなければなりません。目下、メンバー表を作成中です。

また、IUFRO 規約、IUFRO-J 規約など逐次お知らせしつつ、IUFRO そのものの勉強も必要と考えています。お気づきの点はどしどし事務局にお知らせ下さい。  
 (事務局)

IUFRO-J NEWS. No. 1

昭和52年1月

編集発行 農林省林業試験場調査部

TEL 03-711-5171